289
289-N95-3ウ
1200500732246

贈正五位 野村望東尼の晩節、防長寓託の徑路 第三

大能淺次郎

始

289
N95
3

筑紫史談第八拾集 昭和十六年十二月卅日發行 抜刷

贈正五位 野村望東尼の晩節、防長寓託の徑路（承前三）

大熊淺次郎

贈正五位

野村望東尼の晩節、防長寓託の徑路

（承前三）

福岡　大熊淺太郎

著者寄贈本

女傑野村望東尼の熱願の徹する所、薩長の聯盟成立の動きは、愈薩船の三田尻入津の實現となり、防長諸軍の志氣昂揚し、殊に老君毛利敬親公は山口より出陣あり、軍旅の檢閲と云ふ勢威を張り、又長藩の老職毛利内匠は幕府の召命を名義とし雖波に出征し、老君敬親公の仰言を荷へるを傳聞しては望東尼には亦一段の感傷を惹かれ彼れや此れやと咏み出でては、他藩の志氣の旺盛を讃美せられ一面我郷國藩論の振はざる君臣の不一致を慨嘆せられたる此間の心境を想察すべきなり。

敬親公の軍旅を檢閲せられたりと云ふは、三田尻の西方に聳つ桑ノ山南方海邊に沿へる鞠生の松原にして、老君自から山口より此處に乘り付け、出征諸軍を檢閲せられたりと云へり、望東尼も親しく此情況を參觀せられたるを知るべし。左の咏あり。

まりふ松原にてこたびのいくさ立てを公のみ心みせさせ給へるを見奉りける時、此の松原は古へ足利尊氏が軍をすへしところと聞しこと思ひ出て。

御世のためいくさ立て見てやどりしに昔思はゆまりふ松原

望東尼最早や大願を成就し、自から立命を知り此月の十五六日頃よりは病床の人となられたり、實情より推せば月初宮市天滿宮七日間參籠の終りの前後より漸く健康を害せられたりと雖も、忍んで病體の容子を現はされず、時勢は追次切迫し一日を緩ふすべからず、諸隊の出征を見届けざれば已まざるの慨を示し、藩船の入津を迎へては喜び、鞠生松原の閲兵を觀ては自から奮ひ心を勵まし、遂には發病臥床の已むべからざるに至る、然れども平素の氣力精神は依然として衰へず、猶ほ此間の情況を窺ふに足るべき左の如き數首も咏み出たされたり。（便宜歌詞の假名書を漢字に改めし個所あり、赤句點を附す。以下續出之に準ず）

神祓宜のこたび軍の中にまじり行くとて「とかまもて御世のうき草刈りはらはん」などあるに。

たちとかま幣に取り添へ刈る時は何かたまらし雛波江のあし

などありしに

玉の緒も思ひ切るへき武夫の祈らは神も受けさらめやは

をなじころ

山口に染めてこもりし紅葉をつむこそ御世の寶船なれ

こたび別るゝ人に

限りなく別れかたきも世の爲めにあまりて袖の濡れもする哉

またいてたらんとて疑ひける人に

長門のみ吹きのほり行く秋風の仇波くたき歸るをそ待つ

人々の門出の時に

難波潟塵もなきさと打返し花のうら浪さきかへれはや

以上咏み出されたる歌は三田尻に進出後多くの出征軍の誰れ彼の別ちなく餞別せられたるもの歟、就中豫ての相識なる福田俠平抔は薩船入津間もなく諸隊に先發して窃かに上洛し、恰かも政變の危機を包藏したる丁卯慶應三年十月十三日の夜討幕の密勅を薩長侯父子に賜はり、十四日には幕府大政返上の奏議となり、端しなくも福田は長州方として廣澤兵助、品川彌次郎と三人連署を以て奉答書を上ると云ふ場面に登場し、望東尼之の大變局を慮かり咏み出でたる歌も尠からず、茲に從軍の醫師に贈られたる詠草を擧ぐべし。

藥師椋野何かしに贈るとて

御世のためいくさする男の命みな守る君が身なほもいたはれ

又左の如き歌咏あり、詞書なけれども猶ほ從軍の醫師に贈りたるを思ふべし。

いくさ人守るくすりはある時に無きこそ國の藥なりけれ

東ちのあくた積れる難波江を洗ふ藥も君まもるらん

猶ほ亦之れに接續して咏まれたる歌の詞書なけれども同しく從軍の醫伯に贈りたるものと推すべし。

あはれ迅く澄返りなば浪花江の濁れる水に浪も立たじを

望東尼の病中の主治醫としては秋元玄芝に護られ、亦毛利家よりは屢々侍醫を遣はし診察せしめ、諸隊付の醫者も滯陣中の閑を偸んで來診し、有ゆる療養に至りては何等の不自由を感せられず、病勢の猶ほ昂進せざる以前には屢々從軍の醫師を激勵せられたる如上の詠歌ともなりたる等、女傑の最後までの熱情信念思ふべきなり。

扨ても筑前勤王黨は慶應元年の大獄により一網打盡的所刑に服し、唯り望東尼生を保ち姫島の牢獄を脱してよりは防長寓託の身となり、薩長の援助を求めては藩論の挽回に努め、維新回天の氣運を迎へながら藩情依然として振はず、提封五十二萬石の大藩全く一人の志士なきを嘆ずるの時、僅かに我望東尼及び報國隊に寄託せる數人の同志の在るありて使命を繫ぎたるべきなり。

左は去りながら望東尼の三田尻の淹留蹤跡の印するところ、最後まで勤王の餘命綿々として歌詠の間に動き鄕國を思念し同志を顧念するの至情眷々として已まざるものあり、桑野半兵衛や藤四郎等に寄せられたる歌意によりて能く眞情を窺ふべきなり。

椋野報國隊に物したる桑野範造か文おこしける中『隔てゝも又隔てゝも君かため盡す心をへだてやはする』『思ふ事とげさるへきや皇國の道ふみおこすますらをにして』とある。

すべ國をふみおこすべきますらをの身をこそ祈れ神に佛に

隔てなき心こゝろをかたかたにつかひて國の爲めは盡さむ

亂れ來て道うしなへる難波江のよしあし分くる時やこの時

くさか江の濁れる水も澄ぬへしあらし木枯時雨みたれて

亂れ世はいつか別れとなりぬらん身を捨てて世を思ふどちみな

桑野範造とは望東尼が姫島を脱じて長州に赴くの時、船の宗像の大島へ寄航に際し、同島に流謫の一人として救出されたる桑野半兵衛のことにして、尼とは叔姪の間柄にあり、乃ち望東尼の取成によりて以後、報國隊の一人に名を列したるなり。

咏み出てたる、くさかえとは即ち草ヶ江にして福岡城西の大濠涯隈一帶にして生存の同志が禁錮せられたる南丸の獄より此邊境を望見せらるゝを思ひ浮べ、望東尼の薩長聯合軍の出征を歡喜せらるゝと共に、我鄕國の藩情の一新を待望されたる一念至情を窺ふべし。報國隊の中には即ち桑野の外には藤四郎及び小藤四郎、喜多村重四郎(後の穗波半太郎)澄川洗藏等のあるあり、之等に對しては三田尻見聞の近狀を報し、出征軍の事情を傳へては殘れる同志の發憤興起を促がし、之の亂世に何時かは永訣となるべきや圖かり難く、望東尼病床に就かれしより以後の歌として自然の寓意を窺ふべし。望東尼は程なく此世を棄て永別を告ぐるの悲痛を見るに至れり。小藤、桑野の兩人は明治聖世の初め長藩の節度に觸れ悲慘の最後を見るに至れるは惜みても餘りあり。

吉田太郎長崎にて七月比死去のよし桑野がいひおこしたれば。

定めなき人の命と知りながらあたら男のこをまた先だてつ

吉田太郎は藤四郎等と共に姫島の牢獄を打ち破り望東尼救出の一擧に參畫したる同志の一人なり、偶々事を以て薩摩に赴き實行の現場に洩れたるも、平野國臣と同しく足輕階級の身分より蹶起し、夙に望東尼を推重したる一人たり。

藤四郎がもとにやる文に此頃の事いひやるとて

君聞くやきかずは聞きにとひ來かしよしあし渡る難波江の風

姫島救出の頭目藤四郎は望東尼の病臥を知り、間もなく毛利家より尼の重態危篤の趣を傳へられ、此急報に驚き直ちに澄川洗藏と相伴ひ、下關より十八里の路程を厭はず晝夜兼行駈付けたるに、幸に生前の間に合ひ、望東尼は兩人との對面に深く喜ばれ大に安堵せられたりと云ふ、容態愈危篤に陷りては最早時勢を話し鄕國の事を語ふべき術も絶へたりと云へり。獄後當時の病狀の詳細を知らんと欲するも、惜ひ哉藤に寄せられたる書面の一つも殘り居らず、其消息を通ぜられたる日時をも明にせず、去りながら前後の情況より推せば、大山格之助の薩摩より第一船に乘じ入津したる十月の六日頃より病に罹かられ、愈々病寡の人となられたるは其月の十五六日までの間の消息を察せらるべきなり。

扨ても望東尼の終焉の前途には猶ほ記錄せざるべからざるものあり、之れより先き大山格之助が薩摩第一船に乘じ三田尻に到着し、後發の諸船が入津し薩長聯合軍の愈出征するまでには猶ほ四十餘日を空ふし、此間には種々の風說を流布し、却つて幕府よりは海軍を差向くると云ふ形勢を耳にするに至り、望東尼の痛く此間の事情を心配せられたる模樣は左の詠に現はれたり。

世のうき事を聞きけれは人の許に遣すとて。

周防灘しは待つひまに難波舟波打ちかへし寄すとこそ聞け

中〳〵に此方にのみや向ふ島とりしくへくもならんとすらん

幕府は安政年期の頃より海軍を充實し相當の準備を整へ軍艦を以て薩摩を討つか長州を征するかとの議論は疾くに喧傳せられ、之れは佛國人の獻策もあり小栗上野介(名は忠順)の徒が頻りに此說を唱へ幕府の歷史にも明かに記され、榎本和泉守(釜次郎後武揚)等の率ひる軍艦を以て攝播の海上を扼せば薩長は縱令

京都の朝廷を擁して事を舉ぐるとも、忽ち本國の連絡を斷たれ極めて不利の地位に立ち、幕府は之の計慮に出づるを豫想し、薩長軍も亦之れを考慮に入れ、三田尻に敵艦來襲の風說の行はれては望東尼の痛く心配せられたることも敢へて不思議とするに足らず。左の詠は何人に贈られたる歟を知らざるも、他國他方の人に贈られたるものに非ず、同しく三田尻に滯留の一人に寄せて憂思を訴へられたるを思ふべし、病床にありながら客の密かに語りし風說を耳にしては憂思禁ずる能はず、此二首に打混じて亦別に三首の詠あり、之れも人に贈られたる誰れたるを知られざるも、望東尼此頃の述懷思ふに堪へたり。

難波江のよしやあしやはわかねどもかく進み行く世のけしき哉

聯合軍の出征意外に遷延したる爲め種々の風說も行はれ來り、時局は好轉したる形勢を看取せられ勝敗の分岐點は自から察知せられたる事も、此歌意に察せられ、飽くまでも聯合軍の必勝を期し王政復古の必成を信せられたる望東尼の心事を思ふべし。尙ほ次の詠に見て望東尼本來の信念を窺ふべきなり。

奉待たぬ梅のはやさも遲しとて魁て咲く冬草の花

時局の開展大勢既に定まれるに當り時尙ほ早しと唱へ、種々なる異論を狹むものありと雖も、一派の薩長人は斷然策を決し、討幕實行に邁進したるを歡喜せられ、此歌意の寓する所自から此間の消息に相通じ、所感を叙べられ讃美せられたる深意を味ふべきなり。

望東尼老齡既に病床に臥しながら、只管薩長聯合軍の出師を歡迎し、皇運恢興天下一新を待望せられたるに、意外にも出師遷延となり時局は開展せず、却つて異變の風說を流布する抔、痛く病體を惱まされ悲觀せられたる心境想察するに餘りあり。左の詠に見るべし。

立かへり見むと思ひし菊よりも老の此身はばもかれぬべし

如上叙記したる作歌は防州日記遺稿に病中作と題せられたる十月二十五日以後の詠草とは別途に屬するものにして、發病の因る所宮市天滿宮七日間參籠熱願苦行に堪へられたる滿願終末期よりの兆候と推すべく、月の十五六日の前後よりは愈病床の人となられ、此起臥の間に咏み出でられたるものは之れ孰れも病中の作と認むべきか、如上の詠句「老の此身は葉も枯れぬべし」とあり、之れぞ此時既に重態に陷られ自から死期を覺悟せられたる後の歌詠と見るべし、嗚呼、望東尼の根氣の限りを盡されたる最後の眞情に至りては誰れか憐まざるものあらんや。

望東尼發病の次第は楫取男爵の撰碑に望東來=防府=舍菅祠=絕粒廻日以祈=一行之利=遂冒=寒疾=客死於華浦=焉と見へたり、藤四郎の福岡の遺族に寄せたる告訃の書狀には先月十五六日頃より、同所に於て御煩付疫疾に御座候とあり、當時は謂ふ所の寒疾若しくは疫疾は今の所謂チブス性の熱病、始は假染の感冒と視せられたるに、漸次病勢昂上し、終に回復の望絕へ永眠の日は來れり、固より望東尼の期する所は一週間の參籠戰勝祈願誓はれたる斷食潔齋難行苦行を物の數ともせず、而かも老ひたる女性の身を以て一命を君國に捧げられ死は素より覺悟の前とせられたり。

愈重態を報せられては毛利家よりは特に專任の役員と二人の看護を附せられ、諸隊よりは交代に看護に努め、侍醫武田祐伯を遣はされ、山口よりは五里の道程を三回に涉りて診察せしめられ、斯くも鄭重なる取扱を蒙り治療上には寸分の猶豫なく手を盡されたるに顧み、慾目よりすれば望東尼元來氣力精神强く姫島の獄中生活にも堪へられたる體質に推し、病症の性質に考へ、發病當初に無理を重ねず靜養怠らず用心を拂はれたらんには、必すや回復尙ほ幾年の壽命を保たるべきを思ふべし。

二十日を越ゆる頃よりは病勢次第に重く回復を危ぶまれ、月の終りには最早危篤の狀態に陷いられ、辭世の作と見るべき歌も咏み出だされたり。

此の危篤の報に接し急遽下關より馳せ參じ臨終の間に合ひたる藤四郎が、後始末をなし福岡の野村家に送り屆けたる遺稿の中に、病中作と記されたる歌詠都べては十二首殘り居りと之れぞ二十五日より終焉の日までの十日間に咏み出されたるなり。之に據りて病中の情況感想の一斑を窺ひ知るべきなり。

嗚呼望東尼重態の央に於て斯かる遺詠を留む、最後に至るまでの元氣依然として衰へざるは、古人の所謂君子は末路晩年精神百倍すと云へるは蓋し望東尼の如きを言ふなるべし。

病中作　二十五日

手向けする山路の菊に梅の花添ゆる心のかほりする哉

乃ち二十五日は天滿宮の祭日に相當し、前月には山口より始めて三田尻に進出せられたる日に遭遇し、病床よりして花と歌とを手向けられたるを知るべし。

天滿宮には年少の頃より深く信仰を捧げられ、一生の間咏み出でて奉納せられたるもの其數知れず、之れは最終の作とすべし。

二十六日

花浦の松の葉しげく置く霜と消ゆればあはれひとさかり哉

此詠辭世の二首の中の一として世の傳ふる所、或は然るべし、去りながら晨の霜をふみて人間の身を概觀せられたる一時の所感とする方穩當なるべき乎、天氣好晴に連れ忽ち時勢に感じ咏み出だされたり。

ねりかへる小春の日にも長閑なり御代の花咲く時ちかみとて

之れぞ薩長聯合軍の功を奏して皇運回復の遠からざるべきは勿論王政復古一新の御代の到來を期待せられたる信念の發露なるべし。

二十七、二十八の兩日には何の歌をも咏まれず、二十九日と翌月の朔日に咏み出だされし歌意に稽ふれば、此兩日は病勢最も亢進し容態甚た險惡なりしを想像すべし。

二十九日

雲水の流れまとひて花うちの初雪と我ふりて消ゆなり

此詠二十六日の花浦の松の葉しげく置く霜といふ歌と共に辭世の作として世に傳へられたり、次の日の歌と勘合すれば之れも或は辭世の作として咏み出でられたるべし、此日は月の盡日にして冬も央ばを過ぎ寒氣も加はり初雪も降り、容態を傷なひ、臨終の近づきしを期しながら、猶ほ餘命を保たれ神無月も暮れ果て霜月を迎へられしなり。

よひ霜に曉を待つくち柴の思ひの外にきえぬ白露

望東尼は最早死期を覺悟せられたる折柄、此日小田村文助の夫人は態々山口より來り問はれ、周圍の人々愈憂愁に沈み毛利家よりは見舞として菓子や反物を賜はり、藩廳より下關の藤等に急報を傳へられたるは此前後なるべし。

之の毛利家よりの手厚き取成を蒙りたる事情は藤が福岡の野村家に訃報の文言中且は三田尻故老の傳說に殘されたるも、此の消息は病中の歌には現はれず、病勢の昂進の央に自から思ひ付かれながらも咏み盡くされざりしを察すべし。猶ほ多少の詠草あり左の如し。

『因に記す十一月朔日以後の詠は病革まり自から筆授くる能はず、自筆にあらず詞書の文言に微し他人に口授して代筆せしめたるを知るべし。』

霜月朔日小田村ぬしの細君來りぬれば

我がために遠き山坂越へてこし心思へば涙のみして

前記せる小田村ぬしの妻は後の楫取素彥男の夫人にして吉田松陰の遺妹として貴ばれ、望東尼防長寓託の身となり、先づ山口に滯留中は此夫人の介護を受けられたる親交あり、五里の道程を遠しとせず態々來り訪はれたる情誼に對し、望東尼は深く感謝せられたるを思ふべし。亦左の一首を詠まれたり。

同二日山口に歸らゝ暇乞に參られし時

露ばかり思ひ置く事なかりけりついのきはまで君を見しかは

小田村夫人は生別と死別とを兼ね山口へ歸へられたる翌三日には歌を缺きたるも、此三日の夜は主治醫秋元玄芝の來診を受けられし事は四日の詞書として咏まれたり、愈病勢も重く衰弱加はりしにも拘はらず、臨終の間際にも猶ほ數首を咏み出され、詞書も整調し、毅然たる氣力を示されたるは寔に驚かざるを得ざるなり。

同四日昨夜秋元玄芝君か來訪せらるゝ時「靈くせりと思ふ誠は誠かは靈くすがてにも靈くす誠は」と歌をよみ給ひたるよし語りけるによめる。

言へはみな大方の事になりぬなり拜みて泣くに外なかりけり

秋元名は玄芝、維新後には里美と稱したり、三田尻の市醫にして常に荒瀨の家に出入し、望東尼の主治醫として始終治療に盡し、望東尼の病勢重くなるに隨ひては、三田尻滯陣の諸隊付の醫師も亦來り診察をなし、毛利家の侍醫武田祐伯も三回までも來診せられたり。

此の秋元は醫業の傍ら歌道に嗜み、夙に近藤芳樹の流れを汲み望東尼の歌才に敬服し、治療に當りても丹誠を抽んで力を致したる事は望東尼も深く滿足し之れを喜び泉下の客となるも恨なしと、安心立命せられたるべし。

望東尼は所詮回復覺束なきを覺悟し、秋元に向ひ命脈の終らん時を聞かんと頼み、猶ほ限りなき親切に對し、聊か片見として豫て寫せし姫島日記の一節を取出し、末後の思出でに之れを贈呈せり、之れぞ即ち「夢かぞへ」(一名いきのわかれ)と名つけ書き留めたる幽囚中の日記の一節に多少の剪裁を加へ、初めの所を省略し姫島日記と題したるもの一卷の體裁を備へたり、明治朝の二年の文月頃秋元の歌道の師、近藤芳樹は長藩の横村半九郎後の正直(明治八年七月京都府權知事より知事に任ず)に謀り、自から序文を識して之れを印行せり、之れぞ望東尼の秋元に贈られし自筆を底本としたるもの、世に姫島日記として行はるゝは即ち此刊本なり。

五日には咏み出でられたる歌なし、此日頃は最も危篤に迫まられ、藤四郎が澄川洗藏と共に下關より馳せ參したるは四日か或は此五日に當りしと思はれ、望東尼は自から發頭人として己れを姫島の牢獄より救出したる恩義ある藤四郎の到着を待ち兼ね僅かに生前に逢はれたるを深く歡喜せられたりと云へり。

重態に陷られてよりは毛利家より鄭重の取扱を蒙り侍醫の診察且は藩廳側又は藩陣諸隊の看護遺憾なく行屆き、荒瀨家の母親百合子を始め一家親族擧つての介抱を受けられたり、斯くも他藩脫獄越境の老婦人の身として殊遇を受けられしは全く望東尼の君國に捧げられたる晩節奉公の賜と謂はざるべからず。

病後以來二十餘日を經過し、自からは今日か明日かと覺悟し、辭世の作と見るべき歌を咏み出たされては、猶ほも一週間の餘命を保たれたり、斯くて五日の夜より六日の朝に及び愈危篤に迫りながら亦も數首を咏み出で、歌人としての最後の一日を遺されたり。

六日の曉

冬枯の菊のおもわは我心うちあはしてもとはまほしくも

曉に燃え殘る燈影に花瓶の菊の枯れ萎めるを眺めて咏まれたるべし。歌人の感想は一觸即發と云ふべし。

同明がたに

君の惠仕ふる臣のなさけまで重ねて厚き身をいかにせん

此詠は望東尼の重態を聞き毛利家より內旨を承はりたる侍醫武田祐伯は、例の如く馬に跨がり微雷驅け付け三たびも診察に及び、手厚き介抱をなしたる人々の親切に對して感謝の意を表せられたるなり、之れより先き武田霜伯侍醫は、望東尼の姫島脫獄後下關に來りたる頃よりの相識の間柄にて、彼の毛利家の小姓寺內暢藏が太宰府西遷の三條實美公の病氣見舞の使者として西下の砌、望東尼より家鄕への託を受けたるの時、同行したるは此人なり。

同時に藥師武田祐伯ぬしに遣すとて

思ひ置くこともなければ今は唯すゞしき道にいそがせ給へ

望東尼泰然として死地に就かんと覺悟を示し、二十餘日の病臥衰弱も甚しく苦痛の央に、斯くは咏み出でられたるを思ふべし。

同時ごろ武田ぬし山口へ歸るとて暇乞に見へたる時。

冬籠こらへ〳〵て一時に花咲きみてる春は來るらし

此の詠たる毛利家のことを案じ、毛利家の君臣が久しく勅勘を蒙り上洛を禁ぜられたるも今は一陽來復の時、積年の勤王の志を成就すべしとの意を寓し、毛利家を祝福せられたる所に深き意義を存じ、勤玉歌人として最終の逸作と讃ゆべし。

京都に於て討幕の密勅降下と共に毛利家の官位復舊の內旨の下りしは十月十四日にして、望東尼の臨終を隔つる二十餘日前に當り、毛利家には疾くに傳達せられ、君側に伺候する武田祐伯の如き、此極秘の沙汰を知られざるにあらず、望東尼は今に九泉に赴く瀨戸際に之の慶報を耳にし、斯かる歌を

咏み出でられたる奇特思ふに堪へたり。

望東尼之の最後の一日にまで意識明瞭にして正確なる、朝廷の事將た天下の事を願念し、皇運の恢復を確信して此世を棄つるに臨み、武田祐伯侍醫の山口に歸へるを送る、之の一首亦誠に勤王歌人として晩節を飾るものと謂つべきなり。

五日の夜より六日の朝に至り、愈容態險惡を告げ、秋元主治醫も匙を投げ、今は時間の問題と明らめ、山口より參りし武田侍醫の診斷も同案にして、秋元は望東尼より斯くと見定めの上は終期を知らせよと豫ての賴みに背かれず、偉人のことなれば何の愕かるべきぞ、兩醫伯の相談も一致したれば、秋元は猶ほも診察を重ね、今は臨終の遠からざる趣を遠慮なく申し告げられたるに、望東尼は豫て賴みし甲斐ありとて痛く喜ばれ、急ぎて湯水を盥に汲み取らせ、自から起き上がりて肢體を拭き淨め、手づから裁縫し準備し置かれたる白木綿の着物を取出し、服裝を新にしタクスと云へる略式の袈裟樣のものを掛け全く禪尼の姿と改められ、亦同しき白木綿の新しき蒲團の上に端座し、徐ろに臨終の時來るを待たれたりと云へり、之れぞ六日の朝の肅然たる態勢誠に敬虔に堪へざるなり。

斯くて其日晝間は無事に過ぎ去り、夜に入り時移り今は全く臨終の迫まれるを自覺し、身振りを以て藤に知らしめ筆紙を求め何々書き認められしも文字判明せぬに感つかれたる歟、自から打誦せんとしても言ひ得られず、無念無相前方に俯伏し靜かに瞑目終焉を告げられたり、維れ時慶應三年丁丑十一月六日の夜五ッ半時(今の午後九時)を報せり。

望東尼臨終の情況大略は藤四郎よりの鄕國野村家への告訃の書中に見え、三田尻故老の語り傳へたる話柄を參考するのみ、別に遺言の形跡を知られざるなり、藤等の下關より馳せ參したる時は既に危篤の狀態なりしとは云へ、多少の談話を交へらるゝ餘地ありしと思はるゝも、福岡の家人へ遺言を托せらるゝ等の交渉はなかりしと見え、藤よりの告訃の書中には何等文言の證すべきなし。

望東尼は常つて聊か參禪修行に體驗を持たれ、最後の時も趺座結跏して冥相に入らんと心掛けられし容姿を寔ふべし。

望東尼山口に移りてより以後我家の事亦孫子の事に涉り咏み出でたる歌を留めず、全く思を君國の事に潛め寸毫の一身一家の私事に涉らざるは、古の忠臣烈士の志操にも相比すべく、殊に病臥中の遺詠に至りては、女傑の晩節の遺芳として欽唱すべきなり。

望東尼の客死如何に葬儀の執行せられたるか越境寓託の老尼の弔葬を案せざるべからず、難有も環境の事情人手も充足し、物入は總べて毛利家より給與あり、葬式準備直ちに整ひ翌七日晩景桑ノ山の南方曹洞宗正福寺と云へる寺院に於て葬儀を營まれたり、住持の老僧雪巖和尚自から導師となり、法名を本始院向陵望東大姉と授けられ、衆僧出頭鄭重なる諷經嚴修引導の儀を了へ、式後直ちに桑ノ山西麓なる同志の墳墓の地に並び埋葬せられたり。遺骨は茶毘に附せず土葬としたるは望東尼生前の意思を體したるなりと云ふ。

此日三田尻滯留中の締交せる知音の人々や滯陣中諸隊の面々より、女傑の苦節を聞き傳へたる者相競ふて會葬せりと云ふ。小田村文助の如き山田顯義の如きの會葬は勿論の事にして、諸隊士の如きは間もなくして討幕軍に加はり、平定後論功行賞に預り後世顯達榮進の貴紳も當時隊士として會葬したる人々なりしを回想すれば、後の幾百千の會葬に勝る無上の光榮を荷はれしを思ふべし。望東尼の英魂轉た地下に感泣せられたるを想像すべきなり。

此葬儀執行に就ては下關より馳せ參じたる藤と澄川の兩人喪主代理格となり諸事を差配し、一七日の法要を修して後ち下關に歸還せり、藤は報國隊の一人として頗る異色ある人物にして、小倉の戰にも勳功を樹て、防長人の氣受けも宜しく望東尼の信賴厚かりしを以て、藤の三田尻に參りたるは萬事好都合とせられたり、殊に望東尼の遺物遺稿類を整理し持ち歸り、密に福岡の野村家に送達せられたるは勿怪の幸にして、望東尼の晩節の文字が永く天地の間に存留したるは全く藤の功と謂はざるべからず。

藤が之の遺物類を如何なる手續により野村家に送り屆けられたるかは判明し得ざるも、多分訃音を告げたる其の月の十七日附の書狀と同時に送達したるを推すべく、當時幕府の第二征長役失敗後の福岡の騷論も天下の形勢の趨く所を觀望し稍々勤王黨抑壓の氣勢は緩和されたるも、猶ほ生殘の同志は獄中に呻吟し勤王論は全く萎微沈衰し、野村の一家も勉めて世間の耳目を避けられたるの時、告訃の書狀且は遺物類の送り屆けられたるを秘密に附せられ、望東尼の訃報に接しても泣くに泣かれぬ苦境を忍ばれ、而かも此頃野村家には亦しても悲事を重ね、之れぞ望東尼と同じく流謫の處分を受けし、家の戶主たる孫の助作は三ヶ月前に獄死を遂げられ、哀愁一家に充ちたるの時なり。藤四郎の告訃狀は左の如くなり。

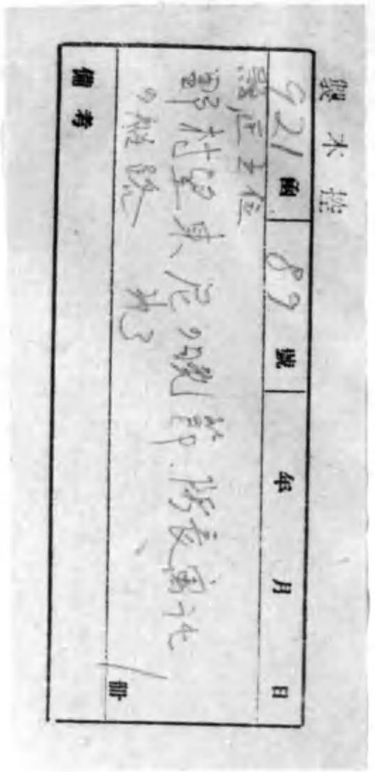
一別以來良久不通音信意外之大失敬奉萬謝候、先以益御清祥御起居被爲在奉賀候、小子儀無異消光仕候、扨て天下之時勢時々刻々變革憤慨に不堪次第、其へ扨置き望東先醒儀本月六日三田尻に於て御病死、實に遺憾嘆惜愁傷之至に御座候、尤先月十五六日頃より同所に於て御煩付疫疾に御座候、御危篤之御容體と申儀、政府より申參り候間、小生並に澄川洗藏と兩人晝夜兼行いたし十八里程罷越候處、甚た御待兼之模樣に而、至而御氣象は慥かに有之、御病氣以前に白布に而座禪法服抔御調製有之、殘所なく御覺悟に御座候、政府より役人並看病者貳人御附被下、君公樣より御見廻として御反物御菓子等頂戴相成候程之御懇命之御事に而殊に御侍醫をも三度迄御差越診療被成下、御自分にも難有涙を被流、御厚慮之程を拜謝相成候次第に御座候、付而者萩瀨善六と申候に宿せられ、同家之家內親類共打寄り眞實に世話いたし呉れ、政府役人並ニ諸隊よりも晝夜詰切交代にいたし、看病藥用に於ては殘る所も無之候得共、御病勢漸々被相重、六日之朝には自から起而沐浴潔服等之上、夜五ッ半時如眠に而御落命に相成申候、翌日桑野山之下に實に手厚き御葬式も相濟み申候、小生共は一七日之追祭相仕廻引取り申候、尤も澄川抔は至極親切に介抱いたし候得共餘の同藩人桑野某はじめは天下之周旋いたし候見込にて添不申と之事にて三田尻へは參不申候、先者右之始末御報知爲可申上如此に御座候恐惶謹言

霜月十七日認　　藤　茂　親

野村荒太先生侍史

此書狀に宛てられたる野村荒太と云ふは望東尼の長孫にして三ヶ月前福岡城南丸の獄中に病歿したる助作の實兒に當

921
89



り、年少の頃より脚疾を患ひ不自由の身となり、一旦父卯左衛門の後を嗣きたるも早く家を弟助作に譲りしなり、實名は貞和と云ひ、望東尼の書面に和ぬしとあるは此人にして通稱は舍（アラヲ）と云ひ、文字が難かしきより藤は簡易に荒太と書したるを思はしめたり、藤は脱藩の身上よりして黒田家の士人の間に通信を憚かりたる所よりして斯くは荒太へ宛てたる眞意を窺ふべし。

書中望東先醒と敬稱し辭令鄭重を極めたる文言よりして藤と望東との交誼の管ならざりしを知り、其棄世に遭ひては人一倍悲哀の情痛切ならざるを得ざるなり。

殊に慶應元年の大獄以來の筑前の士氣は全く萎微振はざるの時に當り、望東尼依然として宿昔の志を維持し晩節苦難に堪へたるも、遂に天業の恢興を見ずして空しく落命せられたるは、藤の落膽失望意表の外に出で、藩論の歸趨にも影響したるべく、有爲轉變の極みと察せられたり。（未完）

「野村望東尼墳節、防長寓託の標路」の終稿に先ち、徐白に防州桑ノ山「贈正五位野村望東尼墓碑文」を收む。裏面に彫刻あり。（大強生）

丁卯之冬。幕府傳ヘ旨。召ニ長藩別封及老臣於大阪一。藩兵屯ニ駐各地一。者請從行。藩議可ヒ之。除衆屯ニ華浦一。開洋有ヒ日。會望東尼來ニ防府一。舍ニ宮嗣一。絶粒週日以祈ニ一行之利一。遂疾ニ衰冒一。客ニ死於華浦一焉。後二十五年。三條內府念ト其以ニ一女子一盡ニ國事一。託ニ余重ニ修墳墓一。因爲ヒ之銘。曰女子名茂登。筑前福岡士族。父曰ニ浦野重右衛門一。尼其第二女嫁ニ野村新三郎一。生ニ四子一皆夭。新三郎死剃髮號ニ望東尼一。尼爲ヒ人吟詩誠審中饋。能執ニ婦道一。尤好ニ國詩一善ニ筆札一。初新三郎之致仕也。卜ニ地城南平尾村山中一。夫妻隱居縱ニ心林泉一。歌詠唱和超ニ然於群流之表一。已而新三郎死。尼旋ニ京師一。歷ニ覽勝地一。問ニ貴公聊之門一。與ニ名士一交。是時際ニ德川氏政衰一。勤王佐幕橫議紛錯。而有志士往々誘ヒ尼以參ニ其議一。藩有司忌ヒ之拘ヒ尼遠流。以絶ニ關係一。是時高杉晉作督ニ除兵一在ニ赤間關一。命ニ部下一奪ニ於醒所一。匿ニ於賈人之家一。後移ニ之山口一。及ニ大阪議起一。尼來ニ華浦一。居無ヒ幾得ヒ疾。危篤之報達ニ山口一。藩主遣ニ侍醫一存問。然醫藥無効。以ニ其年十一月六日一歿。年六十二。葬ニ山口縣佐波郡桑山麓一。明治二十四年冬朔廷錄ニ前之勞一。國事一者ヒ。贈ニ位階一。而望東尼亦在ニ其列一。贈ニ正五位一。踵而墳墓重修之擧聞ニ內廷一。皇后賜ニ五拾金一。而毛利三條諸公各捐ヒ資助ニ工事一。幾ニ其功一。余亦得ヒ完ニ結內府之囑一。因略ニ記尼之偉蹟一。繫ヒ之以ニ銘一。

平尾之山　峯巒邐迤　名媛棲此　絶跡城市　其所涵養　志節烈士
身在絶島　泰然樂只　囚室家居　險夷一視　辰闘衷勤　彼蒼降証
天定勝人　循環有理　吾人鑑此　知可興起

明治二十七年三月　　從三位勳二等　男爵　楫取素彦　撰

921
89

終